# 田吹繁子と短歌

矢島嗣久

## 一　繁子の出生と短歌への道

羽田野繁子は明治三十五年（一九〇二）一月十三日に大分県大野郡上井田村朝地（現豊後大野市朝地町）に生まれる。

大正十年（一九二一）、直入高女（現竹田高校）十二回卒業。母校桜楓会での武島羽衣先生の万葉研究に入会。

大正十四年（一九二五）、日本女子大学校二十二回、国文学部卒業。

母校桜楓会編集部を経て関東高等女学校に昭和二十年（一九四五）三月まで勤務。

若い頃の田吹繁子

昭和三年（一九二八）六月、『大分県歌人』の創刊に関わり、羽田野繁子の名前で多くの作品を発表している。

昭和八年（一九三三）「大分県オール歌人特集」の企画に参加。瓜生鉄雄等との交流によって、大分県歌壇に名を連ねた。瓜生鉄雄は大分市勢家町二丁目の威徳寺の住職で歌人でもある。

繁子はその後も歌誌『由布』『南豊歌人』等にも作品を発表している。

昭和十二年（一九三七）、師「茅野雅子」の日本女子大学の門下生を集めて短歌会「茅花会」を創立する。これに参加する。

## 二　月刊歌誌『八雲』発行

昭和十三年（一九三八）、関東高等女学校で教鞭をとり、教え子を中心に短歌の指導に当たる。

昭和十三年七月から東京目白台厚徳書院から月刊歌誌『八雲』を創刊、羽田野繁子が編集主宰する。

八雲たつ出雲八重垣つまごみに
　八重垣つくるその八重垣を

八雲（やくも）は古事記の中にある、三十一音の短歌のはじまりだといわれているところから名づけた。

昭和十四年二月、風邪がもとで、房総千草の浜、富津（ふっつ）市の万福寺等で転地療養をした。

昭和十九年（一九四四）二月、戦争のため休刊。

昭和二十年三月、東京空襲激化のため帰郷。

昭和二十一年九月三十日、田吹行雄と結婚。別府市錦町（現光町）在住。

昭和二十三年（一九四八）、終戦後、別府で八雲復刊。

昭和二十七年（一九五二）九月から昭和三十一年三月、大分県警「豊之まもり」の短歌欄の選者として警察官へ短歌指導。

昭和二十九年（一九五四）九月二十三日、宮崎白蓮が来県して、首藤克人、静香夫妻経営、別府の「ホテル赤銅御殿」庭園にて、白蓮揮毫の歌碑除幕式が挙行された。

和田津海（わだつみ）の　沖に火もゆる　火の国に
我あり誰そや　思われ人は　　白蓮

この歌碑は「ホテル赤銅御殿」が取り壊されて、高級分譲地となった現在でも、跡地の一隅にある小公園に残されている。

昭和三十年（一九五五）六月、国立別府重度障がい者センター歌会発足。

同九月二十四日、宮崎龍介、燁

白蓮と田吹繁子

柳原白蓮女史歓迎短歌大会
昭和30年9月24日　於 別府赤銅御殿

子（白蓮）夫妻が再び別府のホテル赤銅御殿を訪れている。前年及び本年共に歓迎会の後、ホテル赤銅御殿にて短歌大会が行われた。

昭和三十年から長島壽義氏を通じてグランジャン夫人と交友「国際短歌」と「八雲」を交歓。

昭和三十一年十二月、別府市西野口町七―二四に転居。

昭和三十四年四月、フランスのジャンヌ・グランジャンは歌集『桜』を発刊。歌訳を田吹繁子が行った。

昭和三十四年（一九五九）五月、別府古典文学研究会発足。

ジャンヌ・グランジャン

十二月、『処刑待つ日々』死刑囚佐々木久雄の歌集上梓。

昭和三十七年（一九六二）、大分合同新聞社の「文化賞」を受賞。

昭和四十四年、グランジャンは歌集『白菊』を刊行。歌訳は田吹繁子主宰が行う。

昭和四十五年（一九七〇）から繁子が大分県歌人クラブ会長を務める。

歌集に、ジャンヌ・グランジャンの歌集日本版である『桜』（新星書房、昭和三十四年版）、八雲短歌会の『白菊』（昭和四十一年版）などがある。

フランス語　歌集　桜　八雲叢書五篇
著者　ジャンヌ・グランジャン
短歌訳、発行者、田吹繁子

の巻末謝辞には、「なおこの出版に当たり、グランジャン夫人に贈る私の歌を作曲してくださった高木東六（とうろく）氏、装丁の朝倉攝女史、挿絵セーヌ河をお書き頂いたパリ在住の佐藤敬画伯、フランス語を見ていただいた大分大学の釘宮健二郎助教授、また二豊社社長手嶋正治氏を通じて、多大の御支援をいただきました在京大分県人会の中根貞彦、安藤豊禄、中江俊

一郎その他の諸氏に厚く御礼申し上げます。

昭和三十三年八月二十一日　　田吹繁子」

と記されている。

昭和六十三年（一九八八）四月二十二日、田吹繁子が八十六歳で死去。

自身の歌集は一冊も出していないが、多くの会員を持つ歌誌『八雲』を主宰し、大分県の会員を長年牽引し、優れた功績を残した女流歌人である。

平成十二年（二〇〇〇）新年号より表紙は田吹梅枝（うめえ）氏の書となる。

平成十五年一月、新年号の七一〇号発行。

## 三　田吹繁子の歌碑

兵あまた　命すてたる　この丘は
今秋草の　花にうもるる

◆三国峠歌碑（豊後大野市三重町）

◆昭和三十五年（一九六〇）四月三日

三国峠は明治十年（一八七七）の西南戦争の激戦地であった。

この宮のもりに　あふぐ木さいかちと
しりてよりまつ　花の咲く日を

◆別府市天満神社

◆昭和四十二年（一九六七）四月三日

ふるさとの　用作園に　今日はきて
かがやくもみじ　友と愛でつつ

◆用作公園歌碑
（豊後大野市朝地町）

◆昭和五十年（一九七五）
十一月一日

湯けむりの　たちのぼる町　近く見え
城下の海　蒼く　すみたり

◆日出町

◆昭和五十四年（一九七九）六月七日

日出町で短歌を指導されていた受講生たちが田吹繁子の歌碑を建立したお礼に、繁子が瀧廉太郎の銅像を寄贈した。最初日出町中央公民館前に建立していたが、後に日出城二の丸公園に移設している。

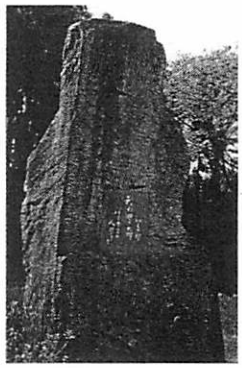
いつまでも　車窓につきて来し月を
ネオンの町に　入りて失う

◆玖珠町

◆昭和六十一年（一九八六）四月六日

いくさ絵を　天に描きて大砲を
はじめてうち志　人思ふなり

◆由布市庄内町
◆平成二年（一九九〇）年九月吉日



**田吹繁子先生寿像、碑文**

昭和の歌人田吹繁子先生。明治三十五年、大分県朝地町に生まれ、大正十四年、日本女子大学国文科を卒業して母校内桜風会編集部勤務後、関東高女在任中の昭和十三年、短歌雑誌八雲を創刊。同二十年空襲のため大分県に疎開。昭和二十四年、八雲を別府で発行、今日に至る。

昭和四十一年　海外の歌人との交友のため、モスクワ、パリを歴訪。

同四十五年より同五十五年まで、大分県歌人クラブの会長を勤め県下各地の歌会に選者として出席した。

なお国立重度障害センター歌会には二十五年間出席指導に当り、また母校通信教育部大分県試験委員長として、三十五年間に三十名の卒業生を出した。

昭和三十七年　大分合同文化賞の受賞の栄光に輝き、同四十七年　朝地中学校校歌作詞　県下には回遊の歌碑を建て、歌人の独自性躍如たるものがある

昭和六十一年（一九八六）四月二十九日、田吹繁子先生の寿像（青銅製）も歌碑と同じく別府市天満町の天満神社境内横の公園内に設置されている。

## 四　日出町の田吹繁子歌碑と瀧廉太郎の銅像

インターネットによれば、瀧家は代々日出町佐尾の洞雲山龍泉寺に葬られているが、廉太郎は大分市の万寿寺に葬られていた。それは、父吉弘が万寿寺の足利紫山和尚と親交が深く、「死んだら引導を渡してもらいたい」と言っており、自分より先に亡くなった廉太郎も、万寿寺に葬られることとなったためである。廉太郎が眠る「瀧累世之墓」の墓碑の側面には、「豊後日出藩」という文字が深く刻まれている。その後の平成二十三年三月二十日、親族の意向により、万寿寺にある「瀧累世之墓」と、妹の「瀧 郁子 墓」、そして廉太郎が卒業した東京音楽学校の同窓有志者が建立した「瀧廉太郎君碑」が、祖先の眠る洞雲山龍泉寺に移設された。

日出町二の丸、日出城址前に瀧廉太郎の銅像がある。これは、朝倉文夫氏制作のもので、歌人の田吹繁子女史より寄贈された。朝倉文夫記念館、大分市遊歩公園、竹田市岡城跡、旧東京音楽学校奏楽堂にあるものと同型で、全国にこれら五体しか存在しない。田吹女史は、昭和十三年（一九三八）に、東京で短歌雑誌『八雲』を創刊し、昭和四十九年（一九七四）から日出町中央公民館で短歌教室を発足。長期間にわたって講師を務め、町内の歌人育成に尽力した。そして、短歌教室の受講生により、田吹女史の短歌碑が日出城址に建立されたそのお礼として、昭和五十六年（一九八一）に日出町中央公民館に瀧廉太郎像を建立。

平成二十二年（二〇一〇）四月に日出城址前に移設された。

銅像には、「偉大な作曲家瀧廉太郎は日出町出身 よって朝倉文夫作のこの像を町の皆さまにおくる　一九八一年三月　田吹繁子」と刻まれている。

## 謝　辞

別府市在住の田吹梅枝様、平田和枝様には各種資料をご提供いただきました。各氏に対しまして、厚く御礼申し上げます。

## 【田吹繁子の略歴】

**明治三十五年**　一月十三日、大分県大野郡上井田村朝地（現朝地町）に生まれる。

**大正十年**　直入高女（現竹田高校）十二回卒業。

**大正十四年**　日本女子大学校二十二回国文学部卒業。母校桜楓会での武島羽衣先生の万葉研究に入会。

**昭和三年**　六月「大分県歌人」の創刊に関わり、羽田野繁子の名前で多くの作品を発表している。

**昭和八年**　「大分県オール歌人特集」の企画に参加。浅利良道、瓜生鉄雄等との交流によって、大分県歌壇に名を連ねている。その後も「由布」「南豊歌人」等にも作品を発表している。

**昭和十二年**　師「茅野雅子」日本女子大の門下生を集めて短歌会「茅花会」を創立。これに参加する。

**昭和十三年**　関東高等女学校で教鞭をとり教え子を中心に短歌の指導に当たる。

**昭和十四年**　二月、風邪がもとで、房総千草の浜、富津市の万福寺等で転地療養をした。

**昭和二十年**　三月、東京空襲激化のため帰郷。

**昭和二十一年**　九月三十日、田吹行雄と結婚。別府市錦町（現光町）在住。

**昭和二十七年**　九月～昭和三十一年三月、大分県警「豊のまもり」の短歌欄の選者として警察官へ短歌指導。

**昭和三十年**　六月、国立別府重度障害者センター歌会発足。

**昭和三十一年**　十二月、別府市西野口町七―二四に転居。

**昭和三十四年**　五月、別府古典文学研究会発足。十二月、「処刑待つ日々」死刑囚佐々木久雄の歌集上梓。

**昭和三十七年**　十一月三日、大分合同新聞社「文化賞受賞」。

**昭和三十九年**　二月、東南アジア、戦跡を訪ねての短歌取材旅行。

**昭和四十一年**　シベリア経由でモスクワ・パリへ（九月二十五日～十月十六日）

ジャンヌ・グランジャンの歌集歌集日本版「白菊」を発行。この白菊をもってグランジャン夫人と長島寿義氏を訪ねるのがパリへの第一の目的であった。

**昭和四十五年** 六月、大分県歌人クラブ会長（昭和五十六年十月まで）

**昭和四十六年** 「灯」七月～五十五年二月、大分合同新聞夕刊に月一回程度掲載。

**昭和四十八年** 八月五日、夫行雄死去。

**昭和五十九年** 「短歌を楽しむ」七月～六十三年五月、西日本新聞大分版隔週掲載。

**昭和六十年** 五月二十七日、「モスクワ・パリ旅日記」八雲叢書五十三集発刊。

**昭和六十三年** 四月二十二日、死去。享年八十六歳。

注　長島寿義氏より繁子宛の手紙
『紫華髪』八雲合同歌集より

〈国際短歌の会創立〉一九四八年（昭和二十三年）

創立者　ジャンヌ・グランジャン・長島寿義
名誉会長　佐々木信綱（日本学士院会員・日本芸術員会員）
日本支部　東京　成宮芳三郎（心の花会員・東京支部長）
九州　田吹繁子（八雲主宰・九州支部長）
パリで国際短歌の会が生まれ、やがてその会員になる。
（昭和四十七年六月二十二日の「灯」より）

**引用参考資料**

「八雲短歌会の歩み」『八雲叢書』第五号　昭和三十四年発行
『八雲叢書』第五号　昭和四十四年五月発行
『紫華髪』八雲合同歌集　平成十五年五月発行
インターネット